幼児をもつ母親の子育てによる心理的行動的変化

Changes of Maternal Attitude and Behavior in Child Rearing

森下　順子
MORISHITA　Junko
（和歌山信愛女子短期大学）

森下　正康
MORISHITA　Masayasu
（和歌山大学教育学部）

本研究の目的は、子育てを通じて幼児をもつ母親の心理的行動的特徴がどのように変化するかを明らかにすることであった。研究1では、子育ての経験を持つ30から41歳までの母親15名を対象に、個別面接を行った。そのなかで語られた内容を項目水準に整理し、行動面、心理面、物的面にカテゴリー分類し出現頻度を求めた。心理的行動的特徴の変化について、出現頻度や内容から代表的なものを32項目選出し質問紙を作成した。研究2では、研究1で作成した質問紙について3歳児の母親を対象として評定を求め、428名分のデータを得た。32項目について因子分析を行った結果、「否定的感情表出」「社会への関心」「子育ての疲れ」に関する3因子が得られた。項目水準や因子水準の分析の結果、一般的に子育てを通じて母親に次のような変化がみられることが明らかとなった。(1) 子育てを通して母親は、怒りっぽくなった、しっかり叱るようになったなどの「否定的感情表出」が多くなった。(2) 他方、責任感が強くなった、人の気持ちになって考えられるようになった、毎日が楽しくなったなど「社会への関心や思いやり、生活の充実感」が高まった。(3) 一般に子育てによる疲れは比較的少ない。子どもと母親との相互作用の特徴によって、子育てについて母親の経験内容が異なり、それに伴う自己の変化のパターンは異なることが予想される。その点を明らかにするのが今後の課題である。

キーワード：子育て、母親、心理的特徴、行動的特徴、感情

問　題

子育ては、子どもの成長とともに、母親の精神的な成長の場でもある。多くの母親は「子どもを取り巻く環境や母親の養育態度が子どもに影響する」ということを意識しながら子育てをしている。そのなかで、例えば母親の期待と異なる行動をした子どもに対して、自分がとった否定的行動に驚き、時には自己嫌悪に陥ることもあるであろう。このような育児や子どもに対する否定的感情やストレスは、多くの母親に経験されることである（佐藤，1988）。親は子どもに対していつもよい関わりができるものではない（園田・数井・無藤・宇佐美，1995）。しかし、母親は子どもに対してこうなってほしいという期待やよい子像を持って育児を行っている（清水・前中・松永・依田，1994）。このような思いや行動と子どもの要求や行動とのズレが、母親に不快感情を引き起こしている。その不快感情を契機にして、自分の関わりを内省して育児を方向づけると考えられている（菅野，2001）。

また、子育ての中で母親の社会への関心も変化するだろう。そして、子育てにより今まで気づかなかった母親自身の発見や成長もあるだろうと考えている。親もまた母親という新しい役割をとるなかで成長していくと考えられるからである（柏木・若松，1994）。

母親は子育てを通して自分自身がどのように変化したと感じているのであろうか。本研究は、子どもを持つ前と持った後で、育児を通して母親自身にどのような心理的行動的変化が生じるかを明らかにすることを目的とする。そこで、まず子育て経験のある女性に個別面接を行い、その内容を検討する。次に、それをもとに作成された質問紙を用いて母親に対して広く調査を行い、因子内容を明らかにする。

研究１　個別面接

目　的

子育てを経験することにより、子どもを持つ前とその後では、母親自身にどのような心理的行動的変化が生じているかを明らかにする。そして、子育てによる母親の心理的行動的特徴の変化を測定するための質問

紙を作成する。

方　法

(1) 面接対象：子どもをもつ30歳から41歳（平均年齢37.1歳）の既婚歴のある女性15名。結婚年齢は平均23.1歳、初産年齢は平均25.3歳、子どもの数は平均2.5人。核家族9名。

(2) 調査内容：「あなたは、子育てを通してあなた自身が変わったなと思うことについて、今から尋ねる質問に答えてください。」という教示で個別面接を実施した。具体的質問項目は、1. 子育てをして、「自分の性格が変わったな」と思うことがあるかないか。「ある」場合の具体的内容。2. 子育てをして、「新しい自分の発見をした」と思うことがあるかないか。「ある」場合の具体的内容。3. 子育てをして、自分にプラスになったことの具体的内容。4. 子育てをして、自分にマイナスになったことの具体的内容。5. 子育てをして、感情（喜怒哀楽）の出し方に変化があったかなかったか。「ある」場合の具体的内容。以上、5 項目に順次回答を求めた。そして、「できるだけ詳しく具体的に自由に述べてください。」と付け加えた。そのほか、面接中に母親自身のことや子育てについて簡単な質問を行った。

(3) 面接実施の手続き：面接は個人面接で行った。日時は、2003年2月～3月である。面接場所は面接者の自宅・面接対象者の自宅・コミュニティセンターのロビーである。いずれも静かで話しやすい場所の設定をした。面接時間は30分程度と提示したが、いろいろな事を話してもらえる事を重視し、特に制限はしなかった。面接者は、被験者に許可を得た上でカセットテープに録音し、必要なときはメモ書きをした。

結果と考察

面接における各問に対して得られた回答を項目水準で分析できるように文章化した。そして暫定的に、行動面の変化・心理面の変化・物的面の変化のカテゴリーに分類し、項目ごとに出現頻度を求めた。その結果、心理面39項目、行動面28項目、物的面３項目、計70項目が得られた（表1）。

心理面の変化は、母親としての自覚、子育てを通して母親自身が成長を感じている面、ストレートに感情が出てしまう面であった。行動面の変化は、「早くするようになった」など肯定的な変化と、「自分の子には厳しい」などの否定的な変化があった。物的面の変化は、「自分の時間がない」「何事にも制限される」など否定的な変化であった。子育て中は自分のために費やす時間や金銭的な面が制限され、仕方がないと思いつつストレスの一因になっている可能性があると考えられる。

面接を通して、母親からは、今までこのような話しをして自分を振り返ることがなくいい機会になったとか、自分の中にあるものが吐き出せ聞いてもらえてよかったという声が聞かれた。そういう意味では、あたり前のようなことでも人に話すということは自分を振り返る機会になり、子育てによい影響を与えられる一因になるかもしれない。

面接中に簡単な質問を行ったが、その結果は次の通りであった。

- 「ご主人は、子育てに協力的か？」という問いに関して、「はい」9名「いいえ」5名であった。
- 「子育てに関して悩みを打ち明けられる人がいるか」に関しては、夫4名・友人14名（重複あり）であった。
- 「子育てのストレスを発散させるところがある」は14名で、その中で夫と答えたのは1名、友人と答えたのは7名、趣味7名・ショッピング5名であった。
- 夫が子育てに協力的というのは、家事を手伝ってくれるや、子どもの面倒を見てくれるなどの道具的サポートが主な内容であった。悩みなどの精神的サポートは、友人にゆだねる母親が多いということが示された。このような傾向が出たのは、対象が幼児期の子育てをある程度通過した母親であるからだろうか。今後の検討が必要である。

次に、表1の「母親自身が子育てを通して変化したと思われる心理的行動的特徴」をもとに、代表的で頻度の高い32項目を抽出し「母親自身の心理的行動的特徴の変化」についての質問紙を作成した（表２）。

表１－１　母親自身が子育てを通して変化したと思われる心理的行動的特徴

項　　目	行動面 心理面	内　　容	頻度
1. 子育てをして自分の性格が変わったなと思うことがありますか	行動面	自己中心・わがままになった	4
		早くするようになった	3
		しゃべるようになった	1
		ずうずうしくなった	1
		大胆になった	1
		外交的になった	1
		社交的になった	1
	心理面	我がでた	5
		怒りっぽくなった	4
		気が短くなった	3
		気が長くなった	2
		きつくなった	2
		強くなった	2
		いらいらするようになった	1
		明るくなった	1
		親の気持ちがわかるようになった	1
		暗くなった	1
		やさしくなった	1
		悩むようになった	1
		たのしくなった	1
2. 子育てを通して新しい自分の発見がありましたか	行動面	自分の子に厳しい	9
		自己中心・時と場合によっては自分一番に考える	2
		子どものレベルに合わせたり子ども中心になる	2
		若いころの夢と現実は違う	1
		おしゃべり	1
		他人の目・人の目を気にするようになった	1
		社会に興味を持てるようになった	1
		毎日楽しい	1
		子どもに対していち人間としてのつきあい	1
		自分を成長させてくれる	1
	心理面	子ども嫌い	2
		感情的	1
		我慢強くなった	1
		怒りながら自分に言い聞かせている	1
		子どもに思いやりがある	1
		気が小さくなった	1
		否定的	1

表１－２　母親自身が子育てを通して変化したと思われる心理的行動的特徴（続き）

3. 子育てをして自分にプラスになった事を教えてください	行動面	友人が増えた	10
		いろんなことに興味がもてる	7
		子どもをかわいいと思える	2
		子どもに助けられる	2
		仕事に役に立つ（人間関係）	1
		夢を子どもにたくせる	1
		子どもに育てられる	1
		先輩からのアドバイス	1
		子育てらしい子育てができるようになった	1
	心理面	責任感が強くなった	3
		人の気持ちになって考えられるようになった	2
		明るくなった	2
		楽しい	2
		強くなった	1
		気が長くなった	1
4. 子育てをして自分にマイナスになった事を教えてください	物的面	自分の時間がない	12
		何事にも制限される（趣味・仕事・我慢・夫と離婚できない）	7
		お金	2
	心理面	我がでた	1
		首絞めようと思ったことある	1
		悩みすぎるようになった	1
		気遣いで疲れる	1
		敏感責任大	1
		体しんどい	1
5. 子育てをして感情（喜怒哀楽）の出し方に変化はありましたか	行動面	大声をだすようになった	5
		しっかり叱るようになった	1
	心理面	そのときの感情でおこってしまう	11
		ストレートに感情が出るようになった	5
		泣いたり、涙もろくなった	3
		自分を押さえられるようになった	2
		表情が早くでるようになった	2
		気が短くなった	1
		イライラするようになった	1

表２　母親自身の特徴変化の質問紙

Ⅱ．あなた自身が子育てを通して、どのように変化したかをお聞きします。次の文を読んであなた自身に最も近いと思われる数字を〇で囲んでください。	まったくそうでない	あまりそうでない	どちらともいえない	まあそうだ	たしかにそうだ
１．責任感が強くなった。	0	1	2	3	4
２．人の気持ちになって考えられるようになった。	0	1	2	3	4
３．明るくなった。	0	1	2	3	4
４．自分の子には厳しいと感じるようになった。	0	1	2	3	4
５．気が短くなった。	0	1	2	3	4
６．我慢強くなった。	0	1	2	3	4
７．感情的になった。	0	1	2	3	4
８．子どもに思いやりをもてるようになった。	0	1	2	3	4
９．怒りっぽくなった。	0	1	2	3	4
10．ストレートに感情が出せるようになった。	0	1	2	3	4
11．我がでた。	0	1	2	3	4
12．気が長くなった。	0	1	2	3	4
13．子どもが嫌いになった。	0	1	2	3	4
14．友人が増えた。	0	1	2	3	4
15．金銭的に大変になった。	0	1	2	3	4
16．いろいろなことに興味がもてるようになった	0	1	2	3	4
17．なんでも否定的に考えるようになった。	0	1	2	3	4
18．なんでも早くするようになった。	0	1	2	3	4
19．悩みすぎるようになった。	0	1	2	3	4
20．子ども中心になった。	0	1	2	3	4
21．気遣いで疲れるようになった。	0	1	2	3	4
22．社会に興味が持てるようになった。	0	1	2	3	4
23．いろいろなことに敏感になった。	0	1	2	3	4
24．自己中心・わがままになった。	0	1	2	3	4
25．大声を出すようになった。	0	1	2	3	4
26．涙もろくなった。	0	1	2	3	4
27．しっかり叱るようになった。	0	1	2	3	4
28．イライラするようになった。	0	1	2	3	4
29．何事も制限されるようになった。	0	1	2	3	4
30．自分の時間がなくなった。	0	1	2	3	4
31．気が小さくなった。	0	1	2	3	4
32．毎日が楽しくなった。	0	1	2	3	4

研究２　調査研究

目　的

研究１で作成した質問紙を実施して、子育てを通じて母親自身どのような心理的行動的変化が生じたかについて、その因子内容を明らかにしながら検討する。

方　法

(1) 調査対象：和歌山県下の６つの幼稚園と２つの保育園に通園する年少児（３才児）の、母親が調査対象になった。475 名を対象に記名式調査を行い、各幼稚園・保育園の協力により 428 名分（男児 218、女児 210)のデーターが回収された。回収率は 90.1% であった。その中で、記入漏れなどのないデーターを分析の対象とした。

(2) 手続き：各幼稚園・保育園を訪問し、園長先生に本研究に関する趣旨をご理解頂いた上で、園児を通して家庭に質問紙を配布した。そして、母親自身が子育てを通して変化したと思われる特徴について母親に評定を求めた。質問紙を配布する際、園長先生からの協力依頼を添付していただいた。回収は園ごとにおよそ 2 週間後におこなった。回収にあたっては、記入後あらかじめ調査用紙と共に配布した封筒に質問紙を入れて封をしてもらい、担任の先生に提出して頂いた。

調査期間：2003 年６月から７月まで。

(3) 質問紙の内容：母親自身が子育てを通して変化したと思われる心理的行動的特徴に関して、研究１で作成した質問紙を用いた。項目数は 32 であった。教示は、「あなた自身が子育てを通して、どのように変化したかをお聞きします。次の文を読んであなた自身に最も近いと思われる数字を〇で囲んでください。」とした。評定は５件法を用いた。評定カテゴリーは、まったくそうでない (0)，あまりそうでない (1)，どちらともいえない (2)，まあそうだ (3)，たしかにそうだ (4) であった。

結　果

(1) 因子分析　母親自身が子育てを通して変化したと思われる特徴 32 項目について因子分析を行った。データー数は 417 であった。まず主成分分析による固有値の変動に注目しながら因子数を決定し、主因子分析を行った。プロマックス（斜交）回転によるパターン行列が表３である。因子数３とした場合の因子は比較的単純構造を示し安定していた。各因子に負荷の高い項目を選び尺度を構成した。各項目の粗点の和を尺度得点とした。各尺度の信頼性を検討するためにα係数を算出した。因子負荷 0.30 以上という基準によって、第１因子は項目番号 9・7・5・28・10・25・11・12・27・4・24 の１１項目を、第２因子は、21・31・19・17・14・29 の６項目を、第３因子は、2・1・16・23・32・22・18・26・20・6・13 の１１項目を尺度項目とした。その結果、α係数は第１因子 0.834、第２因子 0.694、第３因子 0.661 であった。

母親自身が子育てを通して変化したと思われる特徴について、第１因子を「激しい（否定的）感情表出」因子、第２因子を「子育ての疲れ」因子、第３因子を「社会への関心」因子と命名した。

第１因子「否定的感情表出」：子育てを通して、母親自身の否定的な感情の出し方が変化したと感じることを示す。例えば、感情的になった、怒りっぽくなった、大声を出すようになったなどである。得点が高いほど、子育てをする前より否定的感情のあらわし方が激しくなったことを示す。

第２因子「子育てのれ」：子育てを通して、気遣いで疲れるようになった、気が小さくなった、悩みすぎるようになったなど、うまく人と関われないことを示す。得点が高いほど対人関係を中心とした疲れが多いことを示す。

第３因子「社会への関心」：子育てを通して、人の気持ちになって考えられるようになった、責任感が強くなった、我慢強くなった、社会に興味が持てるようになったと感じていることを示す。得点が高いほど、子育てを通して、社会への関心や責任感、人への思いやりが豊かになったことを示す。

表４に因子間の相関係数を示す。「否定的感情表出」因子と「子育ての疲れ」因子の間に正の相関がみられた。また、「子育ての疲れ」因子と「社会への関心」因子の間には低い負の相関があった。

(2) 項目レベルのプロフィール　男女児別に項目ごとに尺度得点の平均を算出した。項目 5「気が短くなった」は、男児の母親の平均が女児の母親の平均より有意に高かった（$F_{(1,\ 415)} = 8.865$，$p < .01$）。また、項目 25「大声を出すようになった」も、男児の母親の方が有意に高かった（$F_{(1,\ 415)} = 7.515$，$p < .05$）。その他の項目は有意差がなかった。男児女児の母親をこみにした項目ごとの平均が図１である。

(3) 尺度レベルのプロフィール　因子ごとに男女児の母親別に尺度得点の平均値を算出した（表５）。「否定的感情表出」「子育ての疲れ」「社会への関心」のいずれの尺度も男女児の母親間に有意差はみられなかった（表５）。男児女児をこみにした尺度ごとの項目あたりの平均値を図２に示す。

表３　母親の心理的行動的特徴の変化の因子分析の結果

	整理番号	因子１ 否定的感情表出	因子２ 子育ての疲れ	因子３ 社会への関心	共通性
1	怒りっぽくなった。	**.801**	−.004	−.093	.658
2	感情的になった。	**.792**	−.067	.035	.577
3	気が短くなった。	**.792**	−.035	−.095	.618
4	イライラするようになった。	**.663**	.179	.012	.632
5	ストレートに感情が出せるようになった。	**.570**	−.160	.117	.356
6	大声を出すようになった。	**.531**	.135	.039	.369
7	我がでた。	**.513**	.067	.021	.375
8	気が長くなった。	**−.486**	.092	.377	.357
9	しっかり叱るようになった。	**.473**	−.107	.313	.334
10	自分の子には厳しいと感じるようになった。	**.373**	−.035	.152	.145
11	自己中心・わがままになった。	**.305**	.189	−.218	.463
12	気遣いで疲れるようになった。	.044	**.755**	.182	.555
13	気が小さくなった。	−.108	**.625**	.022	.438
14	悩みすぎるようになった。	.105	**.613**	.165	.465
15	なんでも否定的に考えるようになった。	.007	**.466**	−.117	.320
16	友人が増えた。	.207	**−.395**	.228	.219
17	何事も制限されるようになった。	.213	**.314**	.116	.285
18	自分の時間がなくなった。	.027	**.239**	.010	.107
19	人の気持ちになって考えられるようになった。	.028	−.086	**.493**	.267
20	責任感が強くなった。	−.015	.041	**.479**	.222
21	いろいろなことに興味がもてるようになった。	.125	−.243	**.452**	.332
22	いろいろなことに敏感になった。	.040	.213	**.435**	.193
23	毎日が楽しくなった。	−.036	−.397	**.415**	.506
24	社会に興味が持てるようになった。	.017	−.078	**.392**	.181
25	なんでも早くするようになった。	.031	.171	**.384**	.153
26	涙もろくなった。	.078	.239	**.364**	.170
27	子ども中心になった。	.051	.229	**.352**	.172
28	我慢強くなった。	−.226	−.012	**.333**	.181
29	子どもが嫌いになった。	.169	.194	**−.305**	.227
30	明るくなった。	.068	−.218	**.272**	.151
31	子どもに思いやりをもてるようになった。	.043	−.119	**.190**	.057
32	金銭的に大変になった。	.188	.140	**.189**	.105
		4.747	3.604	2.642	10.993
	寄与（%）	(14.7)	(11.3)	(8.1)	(34.1)

表４　因子相関行列

因子	否定的感情表出	子育ての疲れ	社会への関心
1	1.000	.444	−.087
2	.444	1.000	−.264
3	−.087	−.264	1.000

因子抽出法：主因子法　回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

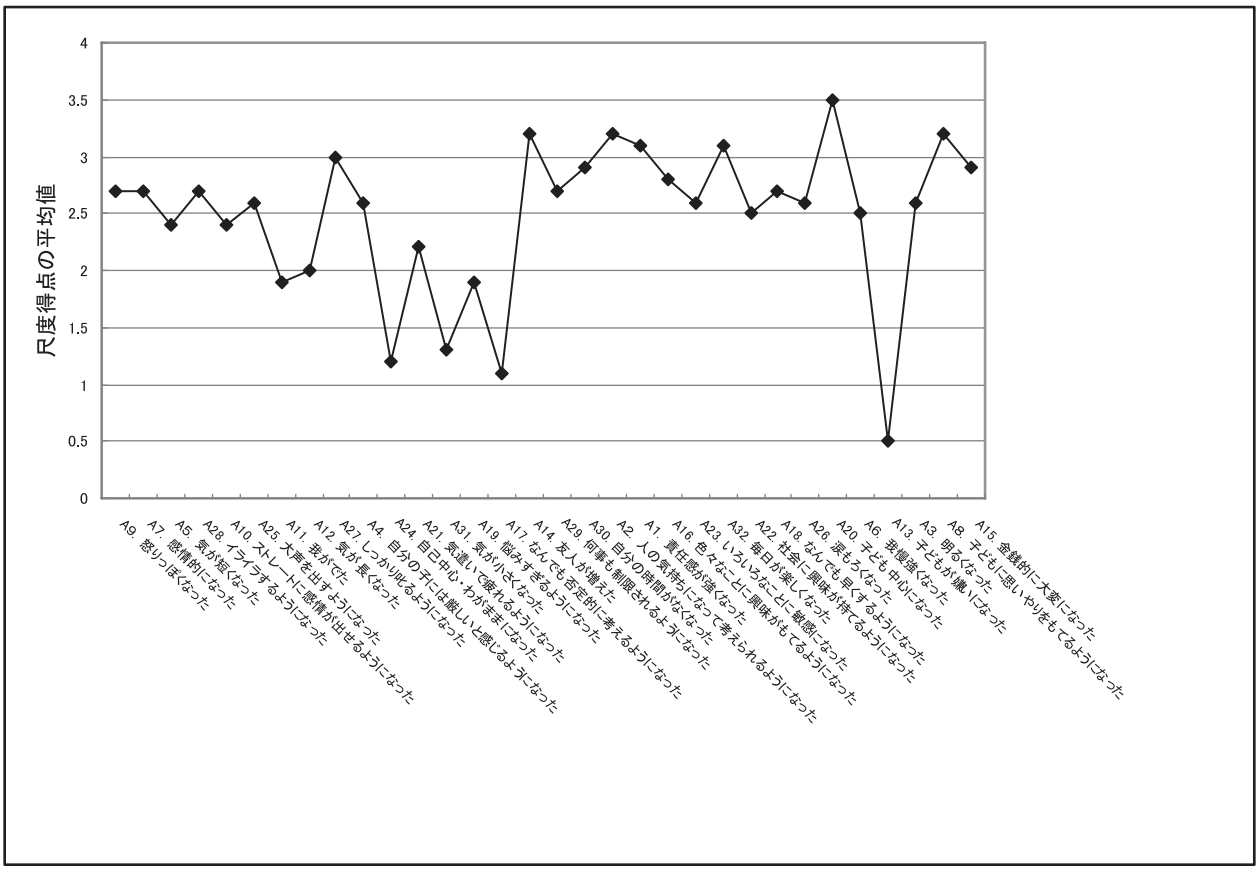

図１　母親自身の心理的行動的特徴の変化（項目得点の平均値）

表５　母親自身の心理的行動的特徴の変化（尺度得点の平均値）

		平均値	標準偏差
否定的感情表出	男	26.9	6.06
	女	25.7	6.95
	合 計	26.3	6.54
子育ての疲れ	男	10.0	4.03
	女	10.0	3.37
	合 計	10.0	3.72
社会への関心	男	32.1	4.78
	女	32.1	4.37
	合 計	32.1	4.57

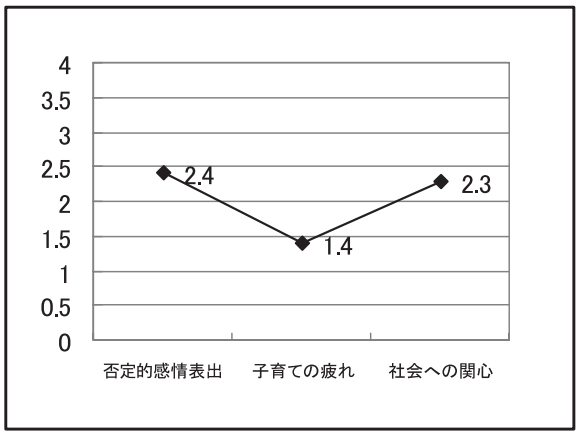

図２　母親の心理的行動的変化（尺度得点の平均値）

考　　察

(1) 因子水準　因子分析をおこなった結果、子育てを通して母親自身が変化を感じている因子が抽出された。一番強く感じている変化は、怒りっぽくなった・感情的になったなどのように、感情がストレートに出るようになった、激しくなったという「否定的感情表出」である。たいていの母親は､子どもを育てる前は、激しい感情や否定的感情を表出する機会は少ないと考えられる。女性は、結婚する前は「女性だから」という社会的制約を感じており、例えば、うるさいよりおとなしいほうがよいとか、かわいくてやさしいほうがよいなど知恵をつけてきている。しかし、結婚することによりそのような制約ははずれ、子どもができることによりなお自由になると考えられる。また、さまざまな経験を積むことにより、人格的に成熟した結果かもしれない。子育ては毎日のことでありストレスが高まる。何回いっても子どもがいうことを聞かない場面や、母親自身の思い通りにならない場面などを多く経験する。そのような子どもとの相互作用の中で母親は「否定的感情表出」をするようになったと考えられる。

また、子育てをすることにより母親は子どもを通して新しい人間関係を経験することになる｡そのなかで、母親にとって無理に付き合わなければならない場面や、子どものために対人関係のあり方に無理をする場面も出てくる。そのようなことがストレッサーとなって「子育ての疲れ」が生じると考えられる。

他方、子育てを通して母親自身が成長したと感じられる変化として、「思いやりや社会への関心」の広がりをあげることができる。他者の気持ちになって考えられるようになった・責任感が強くなったという変化である。子育てを通して、社会を違う視点から見ることができ、そのなかで関心・興味などの広がりを感じていると考えられる。

「否定的感情表出」と「子育ての疲れ」との因子間に正の相関があった。その背景に、子どもから母親への影響が考えられる。子どもが言う事を聞かず育てにくい場合は否定的感情表出が多く、そして母親は疲れてしまう。反対に、育てやすい子どもの場合は否定的感情表出の必要もなく、母親はあまり疲れないということが考えられる。

（２）男女児間の差　男女児別に、尺度ごとに得点の平均値を算出した結果、ほとんど差がないことが示めされた。つまり、母親は男児であろうと女児であろうと、自分の心理的行動的特徴の変化に差を認めていない。ただし項目レベルでみると、気が短くなった・大声を出すようになったという２項目について、どちらも、男児の母親の方が女児の母親よりも得点が高かった。一般的に、男児の方が情緒が激しく活動水準も高いということが影響している可能性がある。

（３）心理的行動的特徴の変化　項目得点の平均値が、「どちらともいえない」の２点より高かった項目は20個、「どちらともいえない」項目は２個、２点未満の項目は10個であった。母親自身が、多くの特徴において強く変化を感じていることが示唆される。特に大きな変化を感じている項目は「20. 子ども中心になった」｢2. 人の気持ちになって考えられるようになった」「8. 子どもに思いやりをもてるようになった」「14. 友人が増えた」であった。子育てを経験することで、自分中心の世界から、自分の子ども、そして他者を思いやれるようになったという事に、母親自身変化を強く感じている。特に「32. 毎日が楽しくなった」が平均値3.1と高い得点であった。母親がそのように感じることは、子どもとの相互作用のなかでとても大切なことである。

反対に､平均値が中央点２より特に低かった項目は、「13. 子どもが嫌いになった」「17. なんでも否定的に考えるようになった｡」｢24. 自己中心･わがままになった」「31. 気が小さくなった」であった。子育てを通して、このような否定的な方向への変化は少ないとい

える。

以上、項目水準において、全体を通して子育てによって自分自身が変化したと感じる内容は、母親自身の成長を感じさせるものが多い。

尺度水準でみると、全体的に子育てを通して母親は、否定的感情表出を示すようになるが、社会への関心や他人への思いやりが高まり、子育てによる疲れを感じるレベルは低いといえる。否定的感情表出を契機に母親は、子育てについて振り返り自問自答しながら、同時に社会への関心や思いやりを高めていく可能性があると考えられる。

子育てにおける母親の心理的行動的特徴の変化は、母親と子どもの相互作用の特徴の影響を受けるだろう。したがって、今後の課題として、子どもの気質の違いや母親の養育スタイルの特徴、その相互作用という視点から母親の特徴を検討し、今日の子育て支援へとつなげていきたいと考える。

＜謝辞＞

本研究の質問紙作成にあたり、ご協力いただきました友人、そしてアンケート調査にご協力いただきました幼稚園・保育園の先生方、保護者の皆様に深く感謝いたします。

引用文献

柏木惠子・若松素子　1994 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み　発達心理学研究　5，72 － 83.

佐藤達哉　1988　育児期母親の育児ストレス・対処・サポートについての基礎的研究　児童育成研究，6，42 － 55.

清水弘司・前中央子・松永顕子・依田　明　1994　幼児を持つ母親の「よい子」「よい母親」「よい父親」概念　家庭教育研究所紀要　15，33 － 43.

菅野幸恵　2001　母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ　発達心理学研究、12，　12 － 23.

園田菜摘・数井みゆき・無藤　隆・宇佐美芳子 1995 母子相互作用における働きかけの質が子どもの愛着に及ぼす影響．日本教育心理学会第 37 回総会論文集，432.